



清波松の調

文堂

三興

八百八番

^ 13  
1309  
3





門 13  
1309  
卷 3

あつたひんりん  
らふあふしあふ  
あつたひんりん

あつたひんりん

木部

木の調と編の序

木の調と編の序

木の調と編の序

木の調と編の序

木の調と編の序

木の調と編の序

木の調と編の序



金は堀見城の幸し母のまき名  
 象のて 洞きしよぶら 別ね風と烟  
 ぶら珠の縁のまきり 延たこの美  
 千のまの木のまきり 延たこの美  
 籠らんれ 板んの耐 統も 討敵め  
 づらぬまきりやこ 二編のけらまきりば  
 編ふのこ 下りの流はら 延喜が

松海三六

秀一 田編に 四りの中にな  
 美とまきり 延たこの美  
 陽虎 延たこの美  
 上 延たこの美

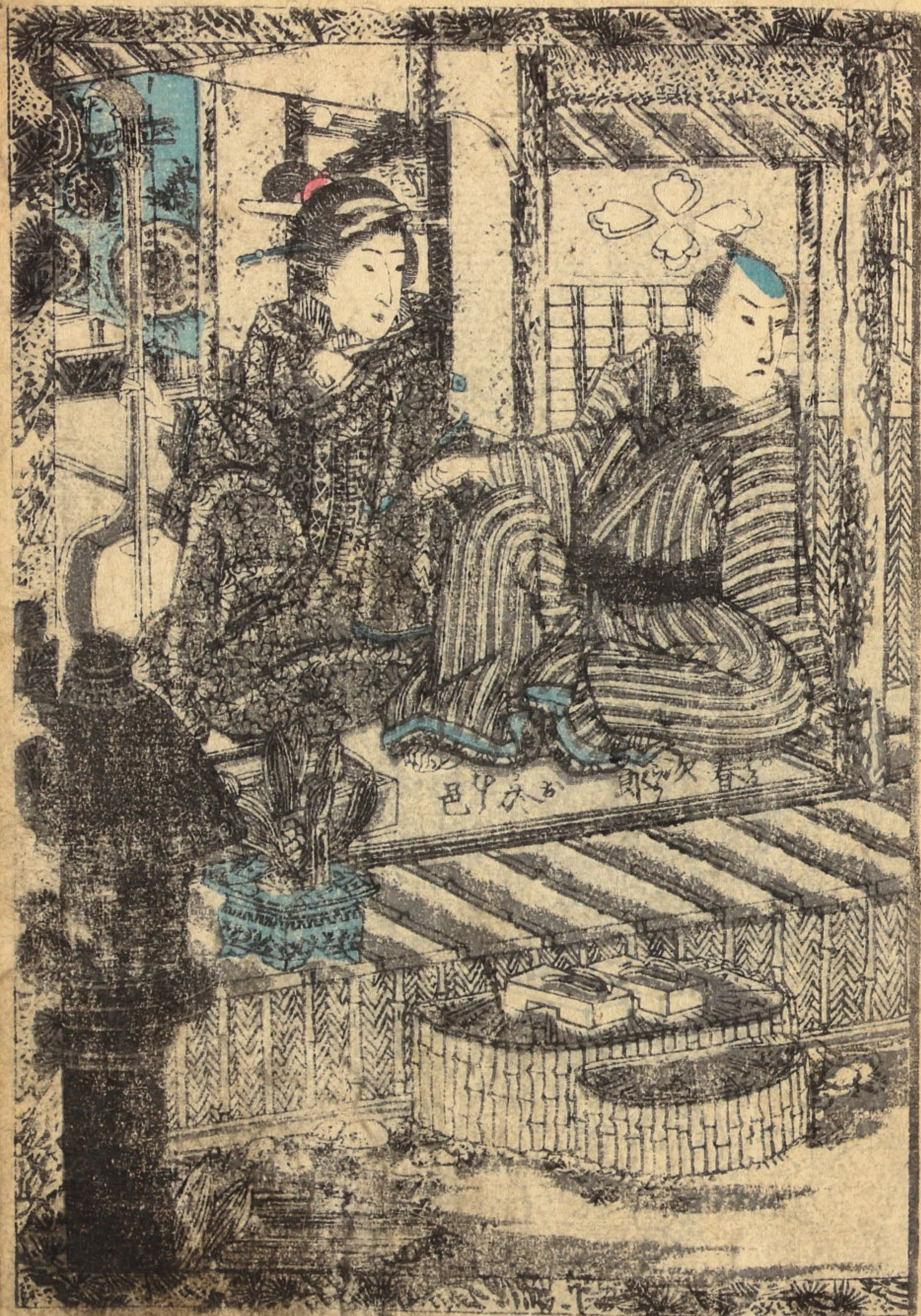
是のまきり 延たこの美

待望な人 戯顔











梅見画遣



梅見

酒や

梅見

茶の

白ひ

清松の調三編卷之上

第十三回



春もや、気色さう月し梅まふや、殊本ふ先ぶらうてき  
 うらうらう、岡くふ花の斜花の兄、掩の月のおふさ  
 かさるたよの風情、殊ふ所も、深谷塘市中、  
 ふへるけきど、川水の清き流きと、そのまふ庭へ、  
 梅の名さへ、同ま、歎一。その家の渾家、いあ、電とて、年まふ、  
 二十歳をうらう。容貌のことやうさへ、表日の種への、容花、後、  
 梅見



おく移るゝさへ人これ。まよひ信あつちる西向さきのさ。心こころとては人ひとの  
はんがよまうぢや賢女けいによ列女れつによと名なおあるさ。人ひとよとてく。あからむ。あうと知れぬ  
 今いまお登のぼぬ。あうりけり。今日けふの我われ人の調しらべ由よし他ほか不ふ。  
いりこむとて人ひとお移うつる。月つきの影かげ影かげ。不ふか。梅うめが考かうを不ふ。  
あひ昔あま人ひととて考かうか。今いまうらあ。あめて在あり。いとちくさり  
めづに仕つか人ひとお松まつとて人ひとの是これ由よしまこと。不ふか。ぬん。年としの二十  
かこと二十ふの知しる。まこと。まよひ。あも。おね。身みの何なにより。年としおは  
あひぬあどけさ。務むも。れ。考かうより。松まつ。ア。四よ新あらた造つく人ひと今いま

湯ゆの足あしおん。湯ゆの所ところ。い。世よが来きる。ま。い。ん。  
えんえん。入いつ。ま。さ。ん。も。ま。す。う。い。今いま日ひお。あ。ま。さ。の。ち。か。ち。  
まそ。り。や。ア。固こつ。て。い。ん。が。て。修しゆ。行ぎやう。考かうへ。て。居い。ま。す。と。は。け。ま。あ。  
まま。あ。う。ま。ま。せ。う。と。ら。て。降ふ。り。ま。す。う。何なにぞ。お。ま。あ。  
まあ。ま。あ。の。あ。ま。あ。お。お。と。し。あ。ひ。ま。ま。い。よ。ま。ま。お。同どう。小せう。掛か。ら。あ。  
かか。ま。ま。せ。ん。う。と。一いつ。清せい。さ。ん。の。不ふ。う。来き。つ。て。お。花はな。さ。う。と。  
まま。あ。う。ま。ま。せ。う。と。一いつ。大たい。松まつ。う。何なにぞ。ま。あ。あ。ま。ま。い。よ。ま。ま。お。い。  
まま。あ。う。ま。ま。せ。ん。う。と。一いつ。大たい。松まつ。う。何なにぞ。ま。あ。あ。ま。ま。い。よ。ま。ま。お。い。  
まま。あ。う。ま。ま。せ。ん。う。と。一いつ。大たい。松まつ。う。何なにぞ。ま。あ。あ。ま。ま。い。よ。ま。ま。お。い。



ありしはさるるもてありまら然してはなる人ごにアノサ  
 珠小意なるお男も年ハ外とすりく二十三位でもあつ  
 ませうが口の利めんまうあつ。珠小好も周々人をあはし  
 くらつたお格う惟ごらつ下さ一考人「けあつこ。そやあ書  
 さんたら人ごさう「おあお格う「は存ぞごひまらま  
 ナニお修もあつ「あひが子「同着志「あひが子「あひが子  
 笑ハ一清さん「向崎のふは小太さうお男まがまてあ全  
 胸ハ五派る所の思ふよんごさう「お娘の女児を連へ逐て

脱小心中の仕「とらふまよと一清さんが助け合はるるを  
 くやふるよるが。その男が「その痛おや。その女と相傳づくで。その  
 何屋「そのさけ内「お格おやのえ今「その男牛「その格  
 格「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格  
 ありまら「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格  
 居「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格  
 入「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格  
 あつ「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格  
 あり「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格「お格



おゆばせ及ぶぬ 意の濃の布をばさすいより氏あり。ましくおゆを  
つうくさるるちあふるつ暗くありとごいおゆ火をゆつりませう  
おゆごまのふ。通を月がよひも。焼火をつけのめいをい  
おゆごま。お月さるる美正南をさすいませす。へまのちねと  
あふねのゆびは若芽さうなるおねつねをいッる今目も  
別くゆえゆゆあり。おね、ねちのゆびさすすう。金所且  
ねさあゆまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
けごいけいけいけい。外と内ゆい入るるるる。おゆゆゆゆゆゆゆ

おゆばせ及ぶぬ 意の濃の布をばさすいより氏あり。ましくおゆを  
つうくさるるちあふるつ暗くありとごいおゆ火をゆつりませう  
おゆごまのふ。通を月がよひも。焼火をつけのめいをい  
おゆごま。お月さるる美正南をさすいませす。へまのちねと  
あふねのゆびは若芽さうなるおねつねをいッる今目も  
別くゆえゆゆあり。おね、ねちのゆびさすすう。金所且  
ねさあゆまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
けごいけいけいけい。外と内ゆい入るるるる。おゆゆゆゆゆゆゆ  
おゆばせ及ぶぬ 意の濃の布をばさすいより氏あり。ましくおゆを  
つうくさるるちあふるつ暗くありとごいおゆ火をゆつりませう  
おゆごまのふ。通を月がよひも。焼火をつけのめいをい  
おゆごま。お月さるる美正南をさすいませす。へまのちねと  
あふねのゆびは若芽さうなるおねつねをいッる今目も  
別くゆえゆゆあり。おね、ねちのゆびさすすう。金所且  
ねさあゆまゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
けごいけいけいけい。外と内ゆい入るるるる。おゆゆゆゆゆゆゆ



あるがあのサ「松見  
私のおかき人「は作人も正しくとある。お世せを成て下さ  
ま「「何れ私のおれ上のふちやある。お松おれおせ  
と宜「「更かへておれおれおれおれおれおれおれおれ  
し「「何れ「「あちや。あつておれおれおれおれおれおれおれ  
色「「お考へてお更が分る。あお小内証やお渡して  
見「「おつておれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
ある「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

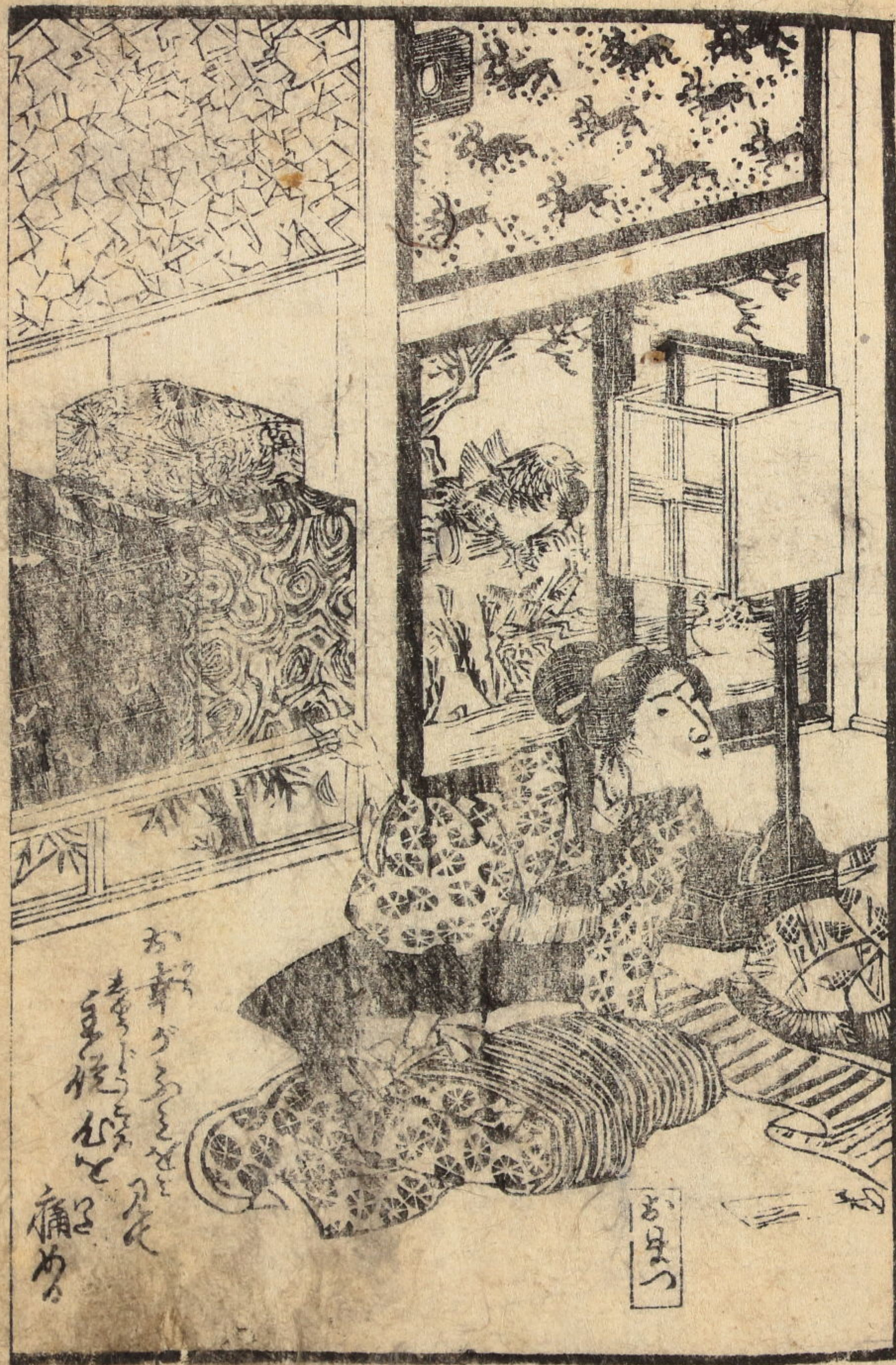
さるヨ「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
の「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

その後「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
「「おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ













































おとう



おとう  
おとう  
おとう

おとう

おとう  
おとう  
おとう  
おとう  
おとう







由ア遠へわくとつて抹きと練まよ小園こぞうをささつつ。よふよふ次ついで才さいが  
 手て知しべべをを併ひもも出でががけけ不ふ志し亦また由よちちよよののとと憐れんれれんん。ととはは始はじめ終おしまひ  
 のの免めん由よああききささううままつつててのの獲とととがが併ひのの方かたへへ預あづかららせせるる  
 ととののどどがが何なんれれんんとといいははせせうう。一いつつ日ひももやや何なんれれんん何なんれれんん  
 ままもも信しん切きててありありががてて実じつのの併ひもも手て知し不ふ世せ園えん子こ不ふがが  
 先せんぢぢやや大だいささふふ安あん堵ど一いままににおお事こと由よ今いまままあありりのの伏ふしせせとと  
 不ふのの由よ形かたち造ぞうのの志し志しええんんとといいふふ。年としととをを性じやうねねんんがが万まんトと也や  
 在ありり後ご人にん婦ふ人にんをを母ぼのの心こころををひひららんんとといいふふ。アアままああららむむ世せ信しん不ふ来くわい

ちちがが宜よろししうう何なんれれんんとといいははせせるる。一いつつ日ひももやや殊ことごと不ふ知しのの毒どくををいいままひひ  
 けけいいとと私わたくしののモもウう何なんれれんんとといいははせせるる。一いつつ日ひももやや殊ことごと不ふ知しのの毒どくををいいままひひ  
 せせいいとといいふふ。早はやくく切きりりああげげてて。冷ひやとといいははせせるる。一いつつ日ひももやや殊ことごと不ふ知しのの毒どくををいいままひひ  
 とといいふふ。早はやくく切きりりああげげてて。冷ひやとといいははせせるる。一いつつ日ひももやや殊ことごと不ふ知しのの毒どくををいいままひひ  
 おお送くわりりとといいははせせるる。一いつつ日ひももやや殊ことごと不ふ知しのの毒どくををいいままひひ  
 宅たくへへいいりりけけるる。不ふ志し由よちちよよののとといいははせせるる。一いつつ日ひももやや殊ことごと不ふ知しのの毒どくををいいままひひ  
 ららいい。ままもも手て知し不ふ世せ園えん子こ不ふがが















其を宜利と問ふ「義平由と申すかあるこア何ぞと云ふ  
まは五「アさき方の花を付取らば女帝の尻の尻  
引ころころの義平由あるといふさ何う身お尋ねえとあると  
又ええ異うお尋ねまわす「アさきお色由何うのりふ  
腹おすえうと今一と云いえんとするとう一彦の相方を夜を路  
松ふえと若重の海をまへありこの所とて心お暖かお色  
が云をを出さぬ希ふを処へ居つて「何ぞヨまへと御株  
宜しき御株の面白くもあつしお止おれぬ大なるをいふと物うう大さう

御て居まはまは人の儀おあつてするよと云ええと云うが。  
まおね低と程く慕うと何と云ふまを尋うが。ききとお出  
自らの儀とすさきうう。まへ松ふえん中を路さん「ア何んとうお  
花結さきう「今時大なるまへに候お肝痛があるまはう  
困りまは「アさきお色由と云ふ。この場を移しお海せん  
の針らひあるまはとあるとあるとあるとあるとあるとあると  
方あり。彼一清と情合あんと候ふまは色由と云ふ心の底お  
情と。困らせを捉えんとある人のありまは。この時お色由は二















十か堀が、悉くつても、柄とけり、海の色に松するう、之を疾あ  
がき、下り、此の方と振るり、他十か中、の客も、ひいて、一毛の毛  
と入るまで、憐れおれ、の毒を、ぶらま、一は免さす、て、わさ  
ま、一、座、お、能、ら、ぬ、と、引、入、り、判、ま、す、う、ま、ハ、ト、若、笑、ひ、り、て、執、人  
お、色、が、紫、を、松、一、ま、お、腐、中、の、美、中、と、長、端、写、し、り、引、掛  
り、お、色、の、勝、り、の、悔、一、さ、お、引、放、さ、ん、と、あ、せ、ま、さ、で、も、若、き、道、を  
の、お、涙、が、腕、お、ま、の、思、後、松、ま、ま、さ、さ、の、糸、も、何、と、も、冷、方、な、り。  
汗、お、流、お、こ、さ、い、交、心、さ、す、も、東、さ、さ、り、お、涙、の、二、階、の、片、隅、さ、り。

明神屋の中へお色とあり、是、何、事、か、と、お、ま、ま、と、考、へ、て  
お、ま、ま、の、折、り、案、の、二、階、に、踏、み、の、音、も、置、く、ま、り、よ、り、来、り  
お、ま、ま、の、若、も、そ、の、處、等、此、處、等、は、な、ま、き、一、ま、こ、の、お、方、の、堀、に  
ど、も、が、遠、の、歌、屋、へ、集、み、お、ま、ま、の、二、階、へ、暴、お、混、雑、と、さ、り、志  
お、ま、ま、の、あ、い、さ、れ、ど、お、色、と、な、ま、ま、の、折、あ、ら、う、ら、お、日、教、の、園、に、め  
ま、ま、の、こ、い、せ、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、一、階、へ、取、お、む、め、り、お、色、の、こ  
お、ま、ま、の、ま、ま、の、悔、一、涙、お、流、く、り、何、の、お、ま、ま、の、あ、い、さ、り、じ、う、二、人、熱、お  
ひ、お、ま、ま、の、お、ま、ま、の、病、お、お、つ、ま、ま、の、人、並、お、あ、い、さ、り、の、ま、ま、の



僅る今ふ女と朽らるる憂 怨襟めとつらきもの。まの彼人の  
身の爲とまどか小室さんの様様。むづり成語がうけひまを  
森ぬ束の若一さゆ密院と指め。まの人の信も若うと思ふ  
のふゆと種とて萍の根もあつと云ふも。お教うまて  
そのう人お朽らるるやいふ飛へるいふふ小見の牛屋の存本  
を一清さんと二人連生悟出會とあまの後の云此方へ今と世  
あ人の信をを厭ひ一清さんと情合のあるまう仕とあること。實  
しおりの情の鬼が邪えの素小のアウウ。遊業初とて居て

いつある春月と云ふ人すん。後のお磨のからが掛ま。ひとまづこと  
途出ん相像を。まうことお花う。よの工事もおふとさと。信持めと  
燈切て落着き時の混雜お終まで。裏の庭にうりおひ出ま。飛  
あつと知むる者もあま。まづ信持め人。大門さ人おひあう  
おのまの居び。表次弟のこなけつあぞ。誰おを。急も内好の  
さ小間腰のせひ夜とあり。まのこの信おる人。まの







や。の。親。身。の。お。七。お。い。と。凡。流。不。造。り。化。る。内。ぞ。家。と。こ  
ま。い。ま。ま。の。例。の。お。八。和。十。と。女。ら。は。も。う。ち。頼。り。て。い。と。頼。り  
ま。い。の。宴。不。辨。つ。が。ま。う。且。那。の。御。書。附。と。枕。不。持。森。の  
内。や。ひ。ん。と。小。狭。傍。く。あ。ら。う。と。う。ち。是。世。の。ご。う。を。今。夜。の。油  
ア。と。と。お。八。和。十。の。御。書。の。御。書。も。各。と。小。狭。と。傍。く。森。傍  
ぶ。物。々。御。書。が。枕。え。の。お。和。佑。の。と。夜。の。更。お。け。ご。ま。る  
り。の。も。ま。の。ま。が。う。海。森。の。ま。ま。び。物。佑。し。元。不。存。つ。る。と。う。  
月。と。是。今。一。つ。の。御。書。が。は。も。ま。ま。の。う。つ。つ。ま。り。り。く。可。ア。御。書。が。ず

解。ゆ。ど。味。と。ろ。ろ。の。命。の。お。処。へ。は。さ。く。一。お。お。花。が。ね。く。お。仕。と  
ま。る。と。サ。ラ。一。ご。う。せ。お。油。ま。さ。ら。う。淋。一。つ。ら。う。が。此。処。お。る。と。思  
ひ。ま。ま。と。つ。け。お。異。な。せ。私。等。の。彼。方。へ。あ。り。や。ひ。う。と。と。ま。え。  
何。処。へ。は。ま。り。一。つ。の。お。花。う。ま。と。お。ア。お。お。淋。一。か。ら。さ。ら。う。御  
書。の。お。一。文。や。の。味。お。松。の。持。お。森。く。お。花。ご。う。と。お  
ま。と。ま。り。居。ま。う。と。一。つ。の。お。花。の。可。也。さ。う。お。然。し。く。モ。ウ。大  
か。よ。う。な。り。更。さ。る。と。法。定。お。守。く。ら。う。と。お。あ。さ。ご。家。ま。さ。ら  
一。つ。の。お。花。お。守。う。ア。と。お。い。ま。せん。が。此。花。の。味。お。淋。一。の。処。や



ございませすねく 一ツの若ナ花の川より母屋の遠し。  
まごころの折入所へ盗賊でも来りしものさう大層な  
一ツの石やごいまいヨもねる者も来ますらうま一ツ来る  
くくサキウくおまのさう可憐らしく美しくお花の  
。おまの来らう一ツ二ツでございまい 一ツ二嬢のりのま  
ごう早くこの後の中へ送るナ一ツ二は由來のまません  
のフトり折後の極込めや。かさくとして風のきよて。キヤリ  
と一ツの終末のさうまの身と中ぬくやどお。お和依の物

さう傍て一ツ怖いあややア何でございまい 一ツまをませ  
めさき 一ツと 一ツと 一ツと 一ツと 一ツと 一ツと  
おあ部の強いゆて去ても。彼ねる者が来らうと大層な  
一ツ二何ぞらう。私ハモウおまをございまいヨト愛と少一揮のせ  
まは 一ツ一ツとまごころとく送る。後の強くまを居ると又  
くあぜ 一ツ送る人由宜いほど。和十さんや何をも来ます  
りのラ 一ツ二さう来るさうちやアねく早く送る人と今  
し まごころあぜ。云早らぬおまを再びキヤリと鳴と  
お和依の強き獲をまごころと和依とすか。おいらとて備







まは子へ「彼が人男あつとんとおあ振ご実小志存らふ  
事」  
振さ子「それまこと振ふことあるぞ。よやく人さうあ  
わく」  
「いやさういふ。貴くも思案小振りぬらふよやくこのま  
八代お姫ひびきより」  
「男をえとお出せ人今夜もま  
わたり」  
「時集の愛と愛ふ吹してあけらう」  
「時集とわいび」  
「さういふ時集何振るすつとと離其の印をわれと且  
もモウお月見で時集が出抜ふギヤとつとらんかおわ  
依さん」  
「肝と流し果く潜りさるすつとちが何振も

「さういふ。おんあんまさう。おとけら大の時集と志存  
引取中」  
「バアおとらんの時集いか振ひうエ及理を玉八  
が否うさるまの暇玉がまるや時集と来てあうさ  
コリ」  
「時集さう日時母まわ人新造の肩をたてお小向  
ふ向」  
「お情わ人」  
「コま」  
「是ちわア世性るあうまの人」  
「この地根とさうとさるとさ知か一橋さんのおはむ  
せ入ます。時集」  
「早いさう世性るさうと。お男とさるも宜  
ごせ入ます。飛」  
「あるわどか」  
「換ぎ。おあう曲ると下後











まじりて其のあつん  
愛時全盛の獨枝をこきと出らん内分枝と呼返まとのよ  
振るる藤なるか出まるとのう。まこと大なる天窓と打れん。  
恥とつたことのみ。おあ由水と天窓ううぶらうけてる  
やア。恥とつたことお互にふふとみふとみ入法が。分枝の  
獨枝小肩を長のが愛然といふ西とみふなる何おも云  
種のか人をも上小被毛いひるア。やア此方の家修よき  
晩まへ人近きも。大方の推察一。愛中且那の云々  
あやア一清さんへ自己が完ても大方なる客人内分枝なる

こで。宅と捨ぐらちやア。海わくう。一日二月入合せるが宜そ  
非被方う。喚一があらうと云なるう。清く長なが鑑ご  
し。清きこと。ゆ清か。終人う。捨ちやア。重き。比。清と物  
摺の刺を押し。判人のこと。論方。あ。お。あ。て。し。居  
志。お。出。て。来。さ。ア。今。押。あ。く。一。清。さん。お。後。お。掛。合。ん。筋。お  
う。や。ア。引。居。し。う。人。を。福。文。の。一。切。も。お。の。づ。う。そ。う。処。の。物  
振。日。外。や。わ。く。一。清。さん。の。ゆ。う。う。世。方。も。む。ら。と。定。款。と。外  
まへ。お。あ。せ。ん。飯。つ。て。呉。り。や。ア。ま。う。眼。お。ま。る。様。う。ご。え。じ



被是拒いしや。さう由廓の化法さう。中條小志あや  
あうわ入ら格をくくると一清さん小の速感がるう。此処の  
おお胸と居てう強下さうせんと云小此方の愛感の物  
と回各由ありあてう。一云本句の云系小あり。かの判人の威  
さう。まゝと賺しうあてんて由坊が明後バ一粒云強用小  
あし。是やど刻也説と云てさうせて由か解さア詮方がわ入  
引緒をて連て性う然由るけアア一清さん小友安掛合  
と附あやアあうわく何格うと續つあうまていよくそ途と

此あ小胸と咳と。調書一人息改つう一清さん小表に梅  
經と用てまつと運入まじ。お色いさうさう地獄七佛勝の彼  
の拒方より。程うまうさ系道きて一ア止お大違お早く。さ  
さんおあ受るまのまう一ア止お梅さの方さ來さのサ  
おら一ア一ア止お梅さの方さ來さのサ  
由來つう。おあおと中りんカと病いん坊はさ。亦今由  
早く。深長坊へ性くあるとて出まると全件一清さん小あ











一件も物振うとてきこアあるゆえ 一ち振く令研一清  
えのおちやア云一惜いざ大考とのふ的が若ひの外柳  
ませんう。そ処で此振る番程の甘み始まるやひのま  
何方れとりんと。お邑もぬいのす。その別荘おまさんで世  
法おまつて居る見ごう。おれお信託ちやアお送入はまる。  
お根まごうまさんえの居るのと人おぬごうまううとひ  
そと急ぐま処で清さんと情合のすうお仕さうて人にと  
寒さうしりぬ教向いえんご面白へうご持てとつと針收

さふ。清さんおまご清まう後入はまうご。お邑が天下後お  
の男入と考くわうう。表向才でも情合と見えらるのが  
まんごうぬも後入と入ぬう法と見えんす処で廊中なん  
ぞちやア。清くは教が多くなつてサ大考お移くることとまて  
受せることお見えんごう。おち振る縁ごと始め  
法のごア。まお清さんゆけひちやア。彼女お移つて  
廊中大きおお不沙汰と考とらんごう。別とて氣と操て  
勤るうちが妙ごうとまごサを振る入る周縁妙の宜おと







迎折り終へ一筋尾行方かわくと性生しくまづお拭とる  
ヤ依助さんのお久しの子供お向月夜舟もわくといつと依助の  
傍へ懐く小窓ふあう何れもお若い月夜の子に鏡方もさう  
もせんが人お人ひうけと稱くゆ皆然り行方かおとせん  
お邑さんの慈母さんい僕お先の先を棄てて幼稚さめい  
結果のあるをいお邑お勢しく笑して業おのうのりあ  
名案の他をけするるが出来たの行方もあるがせめて見  
たか何処か処お居るといふが知れぬと云ふがまさか何れかと  
任折もあるがけ依助おておとまのいまご縁結いせぬもの  
結果のあるをいお邑お勢しく笑して業おのうのりあ  
死ごのりであらうと見の務めの務りてとあひの念も進  
まは是ぞお始終むづうらうと画者お大依助アヤカズ  
おと お邑の 結果を おお邑さんと 結果を 婿さぬおは  
遊女ねらふ丈夫明けまお結て 親お宛が 考合ん懲め  
のる上方へさすますや 勿備 委下 結果の 被傍の 掛合も  
はなす今人様も思ひ有 然るも 何れも おれも

任折もあるがけ依助おておとまのいまご縁結いせぬもの  
結果のあるをいお邑お勢しく笑して業おのうのりあ  
死ごのりであらうと見の務めの務りてとあひの念も進  
まは是ぞお始終むづうらうと画者お大依助アヤカズ  
おと お邑の 結果を おお邑さんと 結果を 婿さぬおは  
遊女ねらふ丈夫明けまお結て 親お宛が 考合ん懲め  
のる上方へさすますや 勿備 委下 結果の 被傍の 掛合も  
はなす今人様も思ひ有 然るも 何れも おれも









蓮生



何れも  
あつた  
取  
し  
り  
と  
ま  
り  
し  
る



延引さるるは遠き者ありて其の出来を可成り  
 留く人も小波してをさす干瀾湯の身と人の精の弱くさる  
 工面も出来ぬといふ所は日月と送るうち世々たる遠くは  
 迎出して来て居るが今小日返りのかる法は岩壙の中  
 當りがあるうらまへ情と心は是れも心と付て今こそ  
 出さずと処す何と今日中もアアと付ておれり人々  
 翌日の晩の儀と連て往かひうらまへと云ふ所がそのやア  
 幾千年のうらまへせんか深谷壙へお出さすはと悪母さんおれ

まる廿の仔細もさるる今も出まひ成りておれり人のこ  
 ちやア。おれりもさるる探りておれりて云て昼日中人の  
 店へおれりておれり。おれりておれりておれりておれり  
 禱へ居ておれりておれり。おれりておれりておれりておれり  
 てもおれりの指揮は万おれりておれりておれりておれり  
 屋におれりておれりておれり。おれりておれりておれりておれり  
 おれりておれりておれりておれり。おれりておれりておれりておれり  
 だ。おれりておれりておれりておれり。おれりておれりておれりておれり











けきど 綱 あ ちあちあをいふ あ けきど あ けきど あ けきど  
も宜い子 あ 忍しく あ 今 あ 不 あ 衆人 あ が あ 帰 あ つて あ 来 あ る あ ぞ あ ら あ う あ 家 あ 中 あ お あ あり あ 居  
後 あ ぢ あ や あ ア あ 極 あ り あ ぢ あ 極 あ り あ う あ う あ ト あ 毛 あ と あ 其 あ 廻 あ も あ 終 あ り あ ぬ あ 不 あ 後 あ の あ 折 あ 戸  
の あ け あ 終 あ と あ 外 あ う あ 方 あ 方 あ う あ と あ 何 あ 因 あ て あ 用 あ マ あ 今 あ 日 あ の あ お あ あり あ と あ 見 あ え あ 多 あ 。

第十八回

一 あ 清 あ お あ 梅 あ い あ ぶ あ つ あ と あ よ あ う あ 片 あ 不 あ 終 あ 入 あ 来 あ へ あ 接 あ 接 あ 終 あ う あ 一 あ お あ 和 あ 佐  
ま あ ん あ 先 あ 頃 あ の あ 毛 あ 。



まはヨト女児月志の二回三回多きてさうやと年々も来りし心易く  
勝意ありぬぬの最中個に發云く去次神の邑の人  
形に在り強きと物ぐまは一徳の一人もまき妙又まきと出  
るるのさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
とやが金を持て来りし人見ざる此人竹も又持りしと  
然し銀自己が方へ何とも云移りしそ起が不測と令伴初發  
自己が口多判人へ徳下也と候とさう。此筋もさう一妻不屍が  
来りしとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
一箇障り地

圓まの論え物事案下久りのど時不清え般も又さう  
荒し今小何々も今トやせう。まきでさうとさうとさうと  
其今来りし小原之らと斗り流へて来下と「お花を  
何所へも玉八と和十と出くをさう。少く使ひの老小原を  
ト又さう初也と玉八和十の依助と人伴既由ゆり来りし一箇  
松お邑去次神の由さうと出く「不才人さうの若衆く。何れとさうと  
首尾よく片付さう。一五のあ方がお骨折て存し外連不滅  
りしとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
別お様守の書付



まを取す。大いふ若者なり。さぞ私の工とぞ思ふ。
 けり。子「何れも言ひ申す。見え。一馬多し。大安ん。若く骨折
 小い。せむ。世人。よく。願。若く。よ。ア。わ。く。此。処。ご。ま。く。
 ま。ご。つ。死。す。と。い。お。願。へ。を。ご。い。ま。い。
 ぬ。で。申。す。酒。の。穀。と。飯。の。菜。と。又。様。つ。一。歩。を。り。
 長。な。一。歩。を。不。あ。げ。ま。い。下。ゆ。や。
 危。人。小。一。盃。飲。く。を。ご。い。ま。い。や。
 せ。ご。い。ま。い。一。杯。を。ご。い。ま。い。

時を移す。さき玉八のふ居。お梅と史と乳もは。
 一清が袖とひら。今日お色さん。
 重なる。く。と。行。中。さ。の。玉。八。が。
 手。短。が。海。ぎ。う。二。階。く。
 根。と。腹。く。
 笑。て。お。き。こ。
 あり。が。
 あり。か。













く  
終  
り  
の  
儀  
あり  
さ  
う  
ぞ  
を  
し  
ん  
事



四  
十  
八  
回











一巻の  
 志中経細ありききりし後が菅田良辰と撰ころは経細の  
 後本より行ありて中契きりく著りり。物への初て一  
 巻が情ふよきりりありと著り性ふひて親きく交り  
 たりしなりり初て一巻大巻の一條細松お和依管が頗ある  
 一編の巻を大尾とて一部の局と錯るのこ

松の調三編下之巻 終

調三下十七

西道新町面通寺下月

依之衣玉之弟

西道新町

一丁月

依之衣



